



Emergency Watch NO. 47 Nov, 2014



神戸こども初期急病センター 2014年10月受診者数：1632人

訴え

1. 発熱：825人（560人）
2. 咳嗽：808人（240人）
3. 鼻汁：571人（18人）
4. 嘔吐：267人（120人）
5. 呼吸困難：263人（215人）

（カッコ内は、その症状を主な訴えとして来院した患者数）

疾患頻度

1. 急性上気道炎・咽頭炎：442人
2. 気管支喘息・喘息性気管支炎：270人
3. 感染性胃腸炎：181人
4. クループ性気管支炎：107人
5. じんま疹：73人

☆ 今月のワンポイント ☆



10月の受診患者さんの数は11月に比べ221人ほど減少し1632人でした。疾患別頻度は先月とほとんど変わりがなく、目立った流行がみられた疾患もなかったといえます。

さて今月は今後罹患・受診数の増加するであろうインフルエンザ感染に関してお話しします。インフルエンザは、インフルエンザウイルスを病原体とする急性の呼吸器感染症です。インフルエンザウイルスに感染すると数日間の潜伏期間を経て、発熱、全身倦怠感、筋肉痛・関節痛などが出現し、鼻水・咳などの呼吸器症状がこれに続きます。通常は1週間前後の経過で軽快しますが、急性上気道炎や気管支炎すなわち「感冒（かぜ）」と比べて全身症状が強く、呼吸器症状よりも早く起こることが特徴です。主な感染経路は会話やくしゃみ、咳等で口から発する飛沫物による飛沫感染であり、他に接触感染もあるといわれています。

迅速検査で診断されることが多く、例年検査目的に受診される患者さんも少なくありません。しかし一般には発熱早期の検査では偽陰性（本当はかかっているにもかかわらず検査上陰性となること）となってしまうことが少なくありません。発熱後少なくとも半日、望ましいのは24時間後に検査することが望ましいと考えられています。したがってあわてて受診せず、家で経過をよく見ながら適切な時期に適切な検査を行うことが医療機関の正しい使い方と思います。

また治療薬は近年様々なものが出ていますがどれも「特効薬」ではありません。治療後発熱が続くことはよくあることです。また肺炎・脳症など稀ではありますが重大な合併症が起こりうるため、治療を開始しても症状や全身状態の推移に気を配る必要があります。

最も大切なのは予防です。インフルエンザワクチンの接種はすでに神戸市の医療機関で開始されています。特に保育園や幼稚園をはじめとした集団生活を行う機会のある方、ご兄弟がおられるご家庭では予防接種はできるだけすることが望ましいと思います。また基本的なことではありますが、飛沫感染対策としての咳エチケット、接触感染対策としての手洗い（手指衛生）、うがい等もとても大切なことです。

